

デング熱の国内感染症例（疑い例）の発生について

1 概要

平成26年8月30日、新発田病院の入院患者が、県保健環境科学研究所のスクリーニング検査で、陽性となりました。確認検査を国立感染症研究所で行います。

当該患者は海外渡航歴がなく、国内でデング熱に感染したと考えられます。

2 患者について

- (1) 年齢等 : 10 歳代、男性
- (2) 海外渡航歴 : なし
- (3) 蚊の刺咬歴 : 8 月 20 日、都立代々木公園周辺
- (4) 発症・受診 : 8 月 24 日発症、8 月 24 日医療機関受診し入院
- (5) 症状 : 発熱、頭痛、関節痛、筋肉痛、発疹
快方に向かっている。
- (6) 検査・診断 : 8 月 30 日、保健環境科学研究所のスクリーニング検査で陽性となり、検体を国立感染症研究所へ送った。
国立感染症研究所では、到着次第、確認検査を行う。
結果判明は、早ければ 9 月 1 日（月）

3 関連情報

- (1) 国内における患者発生状況（国内感染例）
3 例（東京都 2 例、埼玉県在住 1 例）
- (2) 推定感染地域
関係者の調査の結果、都立代々木公園でデングウイルスを保有している蚊に刺されて感染した可能性が疑われています。

4 デング熱について

- (1) 概要
 - ・蚊が媒介するウイルスによる疾患で、アジア、中南米、アフリカ等の世界の広範な地域で流行しています。
 - ・ヒトが感染しても、発症する頻度は 10 %から 50 %で、発熱、頭痛、筋肉痛や皮膚の発疹等が症状として現れます。
 - ・ヒト（患者）— 蚊 —ヒト という経路で蚊を媒介して感染しますので、ヒトからヒトに直接感染することはありません。

(2) 症状

- ・突然の発熱、激しい頭痛、関節痛、筋肉痛、発疹等が現れます。
- ・潜伏期間は 2 日から 15 日と言われており、多くは 3 日から 7 日で発症します。
(潜伏期：ウイルスを持つ蚊に刺されてから、症状が出るまでの期間)
- ・予後は比較的良好な感染症です。
- ・まれに重症化して、出血やショック症状を発症するデング出血熱や、デング症候群に移行することがあります。

(3) 治療法

- ・特異的な治療法はなく、対症療法が主体となります。
- ・現在のところ、有効な抗ウイルス薬はありません。

(4) 予防法

- ・国内では、ヒトスジシマカ（主に日中で屋外で吸血する）がデング熱を媒介する可能性があります。
- ・蚊との接触を避け、刺されないようにすることが重要です。
- ・具体的には、次のことが挙げられます。
 - ①長袖、長ズボンを着用するなど、屋外の作業において、肌の露出をなるべく避ける。
 - ②虫よけ剤等を使用し、蚊を寄せ付けないようする。
 - ③室内の蚊の駆除を心掛ける。
 - ④蚊の幼虫の発生源を作らないように注意する。
蚊は、水辺に産卵する。下水溝、廃タイヤの中や水桶等の人工的な環境下においても産卵し、増殖する。

(5) 参考

デング熱（海外感染症例）の県内発生状況（新潟市を含む）

平成 18 年 1 人
平成 20 年 1 人
平成 22 年 1 人